

「洗礼への招き」

—使徒行伝講解説教 5—

イザヤ書
使徒行伝

第44章 1節～5節
第2章37節～42節

説教 本庄侑子牧師

教会に来るとホッとします。多くの人がそう口にします。しかし、礼拝に出席し続けていると、説教で自分の話をしているとしか思えない時に出くわし、「強く心を刺され」(使徒行伝第2章37節)ることがあります。全てをご存知の神と出会うのです。ペテロの説教を聞いた人たちもそうでした。「強く心を刺される」は、ここだけの特別な表現です。彼らは神と出会い、自分の罪を知るという特別な経験をしたのです。

神が私の全てを知っていてくださる。それは、慰めに満ちていると同時に恐ろしいことです。知らないふりをしてきた、もしくは自分でも気付かなかった罪までもがあらわにされるからです。ペテロの説教を聞いていた人たちは言いました。「わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか。」(37節)自分の罪を知った時、もうこのままではいられないと思ったのです。

ペテロはすぐさま答えます。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。」(38節)

神が説教を通して心を刺すのは、私たちを滅ぼすためではありません。罪を滅ぼして、私たちを救うためです。神は、そのために独り子を送り、十字架につけて殺される、という驚くべき手続きを踏んでくださいました。そして有効となった罪の赦しを、私たちが受け取りさえすればいいようにしてくださったのです。

「悔い改めなさい。」これは、過去を反省し、心を入れ替えなさい！という叱責の言葉ではありません。私の方に向き直りなさい、という呼びかけの言葉です。元の言葉では《メタノイア》、方向転換という意味です。『プレゼントがある。』と言われて、背を向けたまま受け取ることはないでしょう。声の主の方に全身を向けて目を合わせます。悔い改めとはそういうことです。

懺悔も悔い改めの大切な側面です。しかし、ごめんなさいと反省し、これからはちゃんと歩きますと決意したところで、歩く方向が変わらなければ意味がない。神なしで生きてきた人生の向きを変え、神に全身を向けて、神と共に歩む日々を始める。それが悔い改めの本質です。

また、プレゼントを受け取るためには、ひとりびとりが自分の手を差し出す必要があります。それが洗礼を受けるということです。神は、ご

自分の命を注いで用意したプレゼントであっても、首根っこをつかんで、私たちの手にねじ込むようにして受け取らせようとはなさいません。私たち自身が振り返って、自分で手を差し出すのをじっと待っていてくださいます。

そうして洗礼を受ける時、聖霊が与えられます。洗礼を受ける前から、聖霊は私たちに働きかけます。説教を神の言葉として受け取り、心が強く刺されるのは聖霊のお働きです。しかし、洗礼により、聖霊、キリストの霊が我が内に来て下さり、キリストと一体とし、キリストのもの(クリスチャン、キリスト者)としてくださいます。そして、同じ霊をいただいた他のキリスト者とも一体とし、キリストの血筋による神の家族、教会の一員とするのです。

聖霊が私たちの内に住み、教会の一員とし、内から変えていくプロセスを《聖化》と呼びます。愛の人になりたいと思っても、どうやってもなれなかったのが、あのキリストと同じ霊が私たちの内に住んで、キリストのように思い、語り、行う人に、日々、新たに作り変えてくださるのです。洗礼は、自分で自分を変えることを放棄し、神に変えていただくために、自分自身を丸ごと神にお委ねすることでもあるのです。

この時、3000人もの方が洗礼を受けました。「そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。」(42節)彼らは受洗後、教会生活を送るようになりました。「ひたすら」は《固着し続ける》と訳せます。プレゼントは中身を取り出し、使い続けることで、本当の意味で受け取ることとなります。彼らは受洗後、教会生活に固着し続け、聖霊の実りを受け取っていきました。

彼らは教会で使徒の教えを守りました。教会の信仰を学び、自分のものにしていきました。また、パンを裂き、私たちの罪を赦すために体を裂かれたキリストの死を思い続けました。そして、神に向かって祈り続けました。共に学び、共にキリストの死を思い、共に祈るところに、共に神の働きを見て聖霊の実りをいただく、そんな教会の交わりに留まり続けました。

神は手続きの一切を終え、教会を立ててくださいました。全てはあなたの罪を洗い清め、造りかえるためです。あなたが振り返り、手を差し出すのを、今もじっと待っておられるのです。

(記 本庄侑子)